

錢形平次捕物控

御落胤殺し

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、——ちよいと、八五郎親分」

ガラツ八は脊筋をくす擦ぐられるやうな心持で振り返りました。菊
日和の狸穴まみあなから、榎えのきざか坂へ抜けようと言ふところを、後ろか
ら斯うなま艶めかしく呼止められたのです。

「何處だ」

グルリと一と廻り、視線で描いた大きい弧がツイ鼻の先の花色
暖簾のれんの隙間を見落して居たのです。

「此處よ、ちよいと、親分」

「なんだ、——俺を鴨だと思つて居るのか」

ガラツ八は背を向けました。そびら茶店の姐さんが、客の無い怠屈さに、顔見知りの自分へ聲を掛けたのだらうと思つたのです。

「あら、私は此店の姐さんぢやありませんよ。神田から親分の後を跟けて來て、御用の濟むのを待つて居たんぢやありませんか。

ちよいと、お顔を貸して下さいな、内々のお願ひですから」

肩で暖簾を揉んで、輪廓りんくわくが霞むやうな眞白な顔を出したの

は、二十一、二の女、素人とも玄人ともつかぬ、拔群の艶めかしさを發散させます。

「御免を蒙らう、俺は忙しい、——御用繁多だ」

ガラツ八は獨り者の癖に、若い女には妙に突つ劍呑でした。い

やどうかしたら、獨り者だから反つて若い女には無愛想だつたのかも知れず、若い女に無愛想だから、何時まで経つても獨り者だつたのかもわかりません。

「ホ、ホ、ホ、ホツ、ホツ」

女はいきなり笑ひ出しましたが、麻布中の空氣を薰くんじよう蒸しょうするやうな笑ひです。

「何が可笑しい」

ガラツ八は彌造を肩のあたりまで突き上げて、拳骨の先から相手の女を睨め廻します。

「だつて、御用繁多な方が、一軒々々菊細工きくざいくを覗いて、一刻半も油を賣つてゐるんですもの」

「何？」

「その癖、お茶も吞まずに引返すぢやありませんか。良い御用聞がそんな心掛けぢや、世間が穩やかなわけはないねえ」

「――」

ガラツ八は弄ばれて居るやうな憤懣と、妙に腹の底からコミ上

げて来る愉悅を感じました。女の調子には、皮肉な色つぽさがあつて、羽根箒ばうきで顔中を撫で廻されるやうな心持だつたのです。

菊細工はまだ麻布の狸穴坂の兩側を本場にしたら頃、ガラツ八は飯倉へ用事で來た序に、此處まで足を伸して、千輪咲や原始的な細工物や、百姓家の畑に育つたまゝの菊を眺めて、引返したところを妖あやかしの網に引つ掛つたのでした。（註、菊細工の本場は文

化以後染井巢鴨すがもに移り、弘化年間に根津、谷中、駒込を中心として精巧な菊人形に進化し、一時中絶して、明治十年頃團子坂の菊人形に復活したのです。）

「ね、八五郎親分、洒落や冗談ぢやありません、——一人の命に拘はる事なんだから、聽いて下さいな」

女は差し寄つて斯う囁やくのです。

「一人の命？」

「え、私の甥をひが人手に掛つて死んだのに、届けるところへ届けても、取合つてくれる者ありません。それぢやこの世の中は闇ぢやありませんか」

頬に通ふ香ばしい息、——それよりもガラツ八の本能は、話の

重大性を直感して、この女の言ひなり放題に、茶店の奥へ通る氣になつたのです。

「その話を聽かうぢや無いか、人一人の命に係はるとか、甥が人手に掛つて死んだといふ話を――」

二

ガラツ八の八五郎が神田へ歸つたのは、やがて戌刻半いっぴとも思ふ頃でした。

麻布から辿たどつて一刻あまり、夜風にも醒め切れないホロ酔の顔を、押し拭ひもせずに、其まゝ錢形平次の前へ持つて來たのでせ

う。

「親分」

長い舌がペロリと上唇を舐なめました。

「なんだ、八か。今頃何處から歸つて來たんだ」

「親分」

「まア坐れ、入口に突つ立つて物を言ふ人間は無いよ、——あツ、懷手をしたまゝ坐りやがつた、呆れた野郎だ」

平次は口小言を言ひ乍らも、氣の置けない微笑を浮べて、果し眼まなこの八五郎を迎へました。何か素晴らしい獲物をくはへて來た獵犬を迎へる主人の態度——と言つた調子です。

「それどころぢやねえよ、御府内に人殺しがあるのを、御用聞が

知らずに居るといふ法はねえ、——知つて下手人を捕つかまへねえといふ法も無い筈だ、ね親分」

「をかしな事を言ふぢやないか、俺の縄張うちに、目こぼしになつた『殺し』でもあつたと言ふのかえ」

「その通りですよ、親分」

「おや／＼、それは初耳だ。聞かして貰はうぢやないか八、次第に寄つては、十手捕縄を返して、坊主になつて詫わびをしよう。何處の誰が一體殺されたんだ」

平次も少しばかり眞剣になりました。

「親分が悪いといふわけぢやありませんよ、相手の大名が癪しやくにさはるんで、——落付いて聞いて下さいよ」

「俺はあわてちや居ないよ、手前こそ落付いて話せ」

弾み切つた心持を誘^い發^{はつ}されて、二人は思はず顔を見合せました。が、次の瞬間にはもう融然として笑つて居ります。

「斯うですよ、親分、——鎌倉町の源太郎親分のところに、綺麗な娘が二人あつたのは知つて居なさるでせう」

「知つて居るよ。源太郎はやくざだが、姉娘のお銀が大名のお部屋様になつて、跡取の男の子を生んでから、すつかり隠居して、堅氣になつて居るといふ話だ——それが何うしたんだ」

「その跡取の男の子——大名の若様が死んだんで」

「詳^くしく話して見るが宜い、何かわけがあり相だ」

「わけは大ありで——先刻狸^{まみ}穴^{あな}の歸り、後から聲を掛ける者が

あるぢやありませんか。振り返つて見ると凄いほど美しい女で——無理にあつしを茶店へ引入れて、——何を言ふかと思や、平次親分が乗出すやうに、骨を折つてくれと——」

「誰だい、その凄いほどの女といふのは？」

「源太の二番目娘、お銀の方かたの妹のお徳ですよ。親父の子分でお小姓の捨吉と言はれた好い男と出来て、駈かけ落おちまでした札付の娘でさ、一時は品川に巢を構へて小唄か鼻唄の師匠をして居たといふ——」

「何だ、あの轉婆娘か。——さぞ手前は舐なめられた事だらう」

「姉のお銀が大名のお屋敷に上がつて、男の子を生んだ時、親父も氣が挫けたものか、妹のお徳の不始末を勘辨して、捨吉共々家

へ呼び入れた相ですよ」

ガラツハは委細構はず話を進めて行きました。お徳にくす撥ぐられるやうな目に逢はされて、ツイ先刻までポツと酔心地だったことはおくびにも出しません。

「それから、何うしたんだ」

「お銀の奉公先は、江州の小室で一萬二千石の領主小堀和泉守様——江戸御上屋敷は駿河するがだい臺だ。奥方には御姫様ばかりで跡取が無い。行儀見習に上がったお銀は、殿様の覺召に叶つて御手が付き、男の子十次郎様を生んで、御部屋様に直つた。跡取の御腹様で、大した勢だったが、奥方の嫉妬やきもちが何としても激しい」

「——」

「源太郎の娘で、氣象者で通つたお銀の方も、椎茸髷しめたけたぼの女中共に苛めいぢ抜かれて、少し氣が變になつた。到頭若様十次郎を伴れて鎌倉町の親のところへ歸つたのはツイ一と月ばかり前、お邸から人橋かけての迎ひを蹴飛ばして居るうちに、——五日前」

「その十次郎様といふのが霍亂かくらんで死んだといふのだらう」

「へエ、親分は知つて居るんで——？」

ガラツ八の顔の長さ。

「季節外れの霍亂で、源太郎の孫がやられたといふ話は聞いたが、それが大名の跡取りとは知らなかつたよ。源太郎には孫が多勢あつた筈だ」

「錢形の親分でも燭臺しよくだい下暗しさ」

「燈臺下暗しだらう」

と平次。

「何方だつて、大した違ひぢやねえ。——その霍亂が、駿河臺の御屋敷から届いたお菓子を喰つた晩から起つて、翌る日の陽の目も見ずに、若様が冷たくなつて居たとしたら、どんなもんで」

「それは知らなかつた」

平次も豫想外の顔色です。

「菓子に中て^あられたに違ひはねえ。怪しいのはそれを持つて來た桑原伊織といふ侍だが、相手が一萬二千石でも大名だ。町人ややくぎの悲しさ、どんなに疑ぐつでも腹が立つても、ゴマメの齒ぎしりで何にもならねえ」

「――」

「お部屋様のお銀はそれから半病人、親父の源太郎も取る年だし、伴源助と妹婿の捨吉は弱氣で當にならず、お徳がたつた一人で腹を立てゝ、何んな事をしてでも下手人を探し出し、敵が討てない迄も面を見てやり度い、お願いだから錢形の親分さんに乗出して下さるやうに――と斯う言ふ話で」

ガラツ八はお徳の聲こわいろ色まで使つて聞かせました。縁臺の上で、菊の香りにひたり乍ら、二つ三つはお徳にグリグリをやられたのでせう、何しろ、その熱心さは一通りのことではありません。

「そいつは御免を蒙^{かうむ}らうよ、八」

「へエ——？」

ガラツ八は驚きました。話が一段落と見るや、平次はツイと座を立つて、縁側の雨戸を一枚引あげ、水の如く入つて来る月明りの中に、ホツと太息^{といき}を漏らしたのです。

「氣の毒だが、そいつは構つちや居られねえ。俺は町方の御用聞、大名のお家騒動に口を出せる道理もなく、よしや下手人が判つたところで、乗込んで縛るわけにも行くめえ」

「だがネ、親分」

「無駄だよ、八、放つて置くが宜い、手前^{てめえ}はお徳の阿魔^{あま}に魅^み入ら

れたんだ」

「親分」

「判つて居るよ、どうせお銀も跡取を亡くしてお屋敷へ歸れないと決ると、奥方の一味が小癩にさわるから、騒ぎを大きくして公儀の耳に入れ、あわよくば小堀の家へケチでも附けようと言ふ術だらう。——親父の源太郎は今こそ老^{おい}耄^ぼれた顔をして居るが、あれでなか／＼の軍師さ」

平次は益々落着き拂ひます。

「何だか知らないが、主人の血筋を引いた赤ん坊を毒害するのは、あまりぢやありませんか。ねえ親分、主殺しは磔^{はりつけ}刑だ」

「厭だよ、誰が何と言つても、俺は大名の御家騒動に掛り合ふの

は御免だ、——茶碗一つ、色紙一枚ふんしつ紛失しても、腹を切つたり、手討になつたりする世界だ。町方の御用聞は江戸の町人を相手にして、何事もなく暮せば役目は済むんだ。お徳は何と言つたか知らねえが、手前も深入しちやならねえ」

「——」

八五郎は不平でくたまらない様子でした。が斯う言つたら最後、容易に言ふ事を聴いてくれる平次でないことはよく知つて居りますし、お徳に絡み付かれた時の亢奮が次第に醒めると、この事件は全く、町方の岡つ引とは縁の無いやうな氣がして來るのでした。

「親分、それぢや歸りませう」

八五郎はシヨンボリ立上りました。

「何だ、これからねぐら塹へ歸る積りかえ。泊つて行くが宜い、もう亥よ刻過ぎだらう」

「へエ」

さう言ふ平次の調子には、漸く温か味がよみが蘇へります。

「美しい月だが、少し寒いぜ」

四

翌る日の朝。

「さア、起きた、八」

「あ、親分」

ガラツ八が眼を覺ますと、枕元にはすつかり仕度をした平次が立つて居たのです。

「大急ぎで仕度をしろ、鎌倉町まで明け切らないうちに行くんだ」
「行つて下さるんですか、親分」

「當り前よ」

「昨夜の話は？」

「人が聽いて居たんだ」

「えッ」

「手前が、御丁寧にも麻布から馬を^{うま}引いて來たんだよ。御用聞が人に後を跟^つけられて知らずに居るなんざ、あんまり褒めたことぢ

や無^ねえぜ」

「へエ——」

ガラツ八の八五郎、全く開いた口が塞^{ふさ}がりません。

「手前の後を跟けて來て、勝手口の方から裏へ廻つた奴があるから、月を眺めるやうな顔をして、縁側から覗くと、戸袋の隱から、刀の小尻^{こじり}が二本」

「へエ——」

「だから、ポン／＼言つてやつたのさ。——殺したのは大名屋敷の者でも、殺されたのは——大名の跡取だか何だか知らねえが、洗つて見れば町人の子だ、——行つて見ようぜ、八」

「有難てえ、親分、これであつしの顔も立つ」

ガラツ八有頂天で飛出したことは言ふ迄ありません。

鎌倉町へ着いたのは、卯刻^{むつ}少し前、早起きの店は表戸を開けて、往來の掃除を始めた頃です。

「お早やう」

「あ、錢形の親分さん」

源太郎の家の格子を洗はせてゐた若い男が、振り返つて聲を掛けました。

「精が出るねえ、捨吉兄哥」

平次は愛想よく斯う受けました。大尻端折で、二人の子分を指圖して居るのは、二十七八にはなるでせうが、小柄で、意氣で、四ツ五ツ若かつたら、寺小姓のやうに綺麗だつたでせう。お小姓

の捨吉とは、全くうまく附けた^{あだな}綽名だ、——と平次も感心させられた程です。

「親分、よく御出で下さいました、徳がどんなに喜ぶでせう」
捨吉は端折をおろすと、男のくせに片^{かたゑくぼ}壓を見せて、まだ閉め切った儘の奥へ入つて行きました。

それから、顔を揃へる迄には四半刻もかかりましたが、平次は寸刻も無駄にせずに、仕度の出来たのから順々に逢つて行つたのです。

最初に出て來たのは、隱居の源太郎、これはもう七十を越した老人で、氣ばかり減法若くとも、事件にはあまり關係があり相にも思はれません。

「錢形の親分、皆んな氣の弱いことを言ふが、あつしはお徳の言ふのが本當だと思ひますよ。いよく孫の敵と決つたら、相手が大名だつてビクともすることぢやねえ、一番禪ふんどしを締め直して、四つに取つ組んで見ようと思ふが何うだらう」

斯んな事を言ふ親爺だつたのです。大柄で筋骨きんこつたく逞ましい身體や、額の疵きずや、赤銅色の刻みの深い顔など、惡人らしくはありませんが、大親分の昔を忍ばせるには充分です。

「あら、八五郎親分、——矢張り錢形の親分を伴れて來て下すつたのね、有難うよ、お前さんは親切さうだから、きつと私の頼みを聽いて下さるだらうとは思つたけれど——」

お徳は派手はでなしなを作り乍ら、もうすつかりガラツ八を『お前チユト

『^{アイエ}仕掛』で呼んで居ります。天道様てんたうの下で見ると、決して良い容き貌りやうではありませんが、陽氣で仇つぽくて、調子がよくて、これで厚化粧でもしたら、随分ガラツ八を面喰はせたこととせう。

「お徳さんかえ、昨日は八五郎が飛んだ世話になつたんだつてねえ、昨夜は寢付けないほどの逆上のぼせやうさ」

「あら、錢形の親分さん」

ちよいと振り上げた袖が、平次の肩を打つ眞似をしようと言つた性たちの女です。

お銀やお徳の兄で源太郎の後を繼いだ源助は、四十近い年配で、無口な氣むづかし相な男でした。親父の顔で厭々乍ら多勢の子供を預かつて居りますが、七十を過ぎた親父の源太郎に萬一の事が

あれば、惜氣もなく縄張を人にやつて、堅氣の商賣をするだらう——と世間は言つて居ります。

「お早う御座います。錢形の親分、妹のやつが、飛んだことをお願いした相で」

落着いた陽氣な調子は、妹の出過ぎた仕打に、腹を立てゝ居るやうに取れますが、本人は案外平次の出馬に感謝して居るのかもわかりません。

源助の女房のお冬は三十そこく、少し病身らしい、こんな稼業には似もつかぬ平凡な女です。

最後に顔を出したのは、お徳の姉で、お部屋様のお銀でした。

「――」

平次はたつた一と目で、唸^{うな}つたほどのこれは好い縹^{きりよう}緞^{うな}です。

寢起らしい不活發なところの微塵もない、爽やかな表情のうちにも、愛兒^{うしな}を喪^{うしな}つた悲痛な隈があつて、藕^{ちふ}たきばかりの美しさに、泌^{にじ}み出る自然の愛嬌も世の常ではありません。

こんなのは、人間の子の中でも、變り種の大傑作で、眼が何う、鼻が斯うと言ふ種類の美人とは、全く質の異つたものです。妹のお徳は仇つぽい作爲的なしなで、ちよいと見は綺麗にも艶やかにも映りますが、斯う並べると、玉に彫^{きざ}んだ女神と、焼棒のお狐様ほどの違ひがあります。一萬二千石の大名が、たつた一と目で所望したもの、奥方が必死の嫉妬^{やきもちぢん}陣^{じん}を布いたのも、決して無理ではありません。

「錢形の親分さん、妹が飛んだことをお願い申した相で——」
唯のやくざ、源太郎の娘に返つて、へり下つた態度も、妙に人を悲しませます。

源太郎の家族と言ふのは、これが全部でした。

「他には」

「子供達が居りますが、十一から下で、三人共まだ夜中ですよ」
捨吉は取なし顔に斯う言ひます。

「お前さんの？」

「いえ、飛んでもない」

莞爾にっこり

とすると又片かたゑくぼ 壓おさ

の寄る捨吉、極り悪さうに手を振つ

て見せるのは、子供は皆んな源助のだ——と言ふ意味でせう。そ

れにしても、この男の美しさも尋常ではありません。

五

平次は一通り皆んなの言ひ分を聞きました。が、小堀家からの使者として、側用人桑原伊織が持つて來た、立派な菓子を喰べさせると、若様の十次郎は、その晩散々に苦しんで、翌る日も待たずに死んだ——と言ふ以外には何の手掛りもありません。

たつた三つになつたばかりの十次郎は、一と晩の苦惱に骨と皮になつて、死體には凄まじい紫斑しはんが一杯であつたと言ふのですから、毒殺されたことは、先づ疑うたがひも無いことでせう。

「他にその御菓子を喰べた人は？」

「あつしが孫の招伴に預りましたよ」

源太郎は少しまうろく耄碌した、首を振ります。

「お前さんには中あたらなかつたんで」

「中るもんですか、——若い時分には、四人で海豚ふぐじ汁をやつて、

三人まで死んだのに、あつし一人腹がチクリともしなかつた事がありますよ、毒なんぞにやられるやうなヤワな身體ぢやねえ」

肉體の衰へを自覺しまいとする、年寄の一徹てつさをムキ出しに、斯んな事を言ふのでした。

「海豚と毒藥とは違やしませんか、——子供にだけ中る毒てえのはあるでせうか」

ガラツ八が囁くのを押へて、

「黙つて居ろ。孫太郎蟲のやうな子供だけに利く薬がある位だから、子供だけにきく毒だつて無いとは限るまい」

平次はそんな事を言ひます。

「菓子を搜して見ようぢやありませんか」

「もうあるまい、——が、訊いて見な」

平次に承知をさせると、ガラツ八は早速残りの菓子を見せてくれ——と言ひ出しましたが、不思議なことに、誰もその後で菓子を見た者が無かつたのです。

「榮御前も八汐しほも居るよ、證據になる菓子などを、其邊に残して置くものか」

平次にさう言はれると、ガラツ八は躍起となりました。暫らく奉公人や子分を一人々々、しらみつぶ虱潰しに當つて居りましたが、やがて、

「お勘坊が捨てたやうですよ」

誰やらが斯う言ふのを聴くと、いきなり、十六七の相模者さがみものらしい下女の襟髪を掴んで來ました。

「さア、言つて了へ、菓子を何處へ隠した」

ガラツ八の馬鹿力が、容捨もなく汚な作りのお勘坊をさいなみます。

「痛いよ、何をするだよ」

「菓子を何處へやつた、それを言へ」

「坊ちゃんが中てられた菓子だつて言ふから、裏の埃溜ごみだめへ捨てゝ了つたゞよ。誰が喰つても悪かんべい」

「よしッ、一緒に來て見ろ」

ガラツ八はお勘坊を引つ立てました。續く平次、何やら期待する様子で、ニヤリニヤリと笑つて居ります。

「あッ」

「何處だ、そんなものは無いぢやないか」

「一つも無いよ、確かに此處へ捨てたんだが——犬でも喰つたぢやないかね」

「馬鹿ッ、犬が菓子を喰ふか、それも三つや四つぢやあるめえ」
「二三十あつたよ」

これでは手の付けやうがありません。

「お勘、——誰に頼まれて捨てた」

平次はズイと出ると、お勘坊の縞目しまめの怪しいあはせ袷あはせの肩に手を掛けました。

「——」

見上げたお勘坊の白い眼、反抗と敵意が燃え上つて居ります。

「お前の智恵ぢやあるまい」

「霍亂かくらんになる菓子かしを捨てる位の智恵はあるよ」

「よし、お前は思ひの外俐口さうだ、がこれは隠し切れる事ぢやないよ」

平次はそれつ切り手を引きました。

「」

うな垂れると紫色に見える首筋、矢張り女の子らしく、白粉位は塗りこくるのでせう。それが脂と埃あぶらほこりに交つて、地色の褪セシ赭アを紫色に仕上げて居るのです。

六

事件はその日のうちに飛躍的な發展を遂げました。

「親分、變なのが來ましたぜ」

ガラツ八が面喰つて取次いだのは、その日の晝近い頃です。

「りゃんこ二本差か」

「いえ、こればかりは親分も見當が違ひましたよ、椎茸髷しひたけたぼで——」

「丁寧にお通し申すんだ」

「へエ——」

道化だうけた様子で取つて返したガラツ八は、間もなく椎茸髷——と

言ふのは大袈裟おほげさですが、少なからず御守殿の匂ひのする、三十前

後の女を案内して來ました。

「私は小堀和泉守様御上屋敷に仕へて居ります、早瀬はやせと申します、

御見識おみしり置きを——」

三っ指が縁無し疊の上を滑つて、小笠原流にピタリと極るのを、
錢形平次さすがに持てあまし氣味でした。

「へエ、あつしが平次で、——御用は何でございませう」

「内々にお願ひ申上度いことがございます、お人拂ひを——」

「ハハ、人間らしいのはあれ一人ですが、あれは八五郎と言ふあつしの子分で、何を聞かせても心配のある人間ぢや御座いません。馬だと思つて、御遠慮なく仰しやつて下さい」

平次は氣輕に笑ひました。小笠流に對抗して、五分も引けを取らぬ心得の準備だけは出來たのでせう。

ガラツハはプイと背を向けました、——馬だと思つて——が少し氣に入らなかつた様子です。

「それでは申上げます、が、御存じの通り小堀家は御先祖たふみの遠江守政一様以來茶道の御家柄で、東照公様御封の遠州流奥傳の秘書と、江州小室一萬二千石永代えいだい安堵あんどの御墨附を、二つの家寶と

いたして居ります」

「――」

物々しい前置き、平次もガラツ八も固唾^{かたづ}を吞みました。

「その二つの家寶が、一と月ほど前から紛失いたしました」

「一と月前？」

「左様で御座います、お部屋様御銀の方が、御里へお越し遊ばされた頃に當ります」

お銀が疑はしいと言はぬばかり、屹と舉げた顔には端然として、感情の動きもありませんが、腹の中はもうそれに決めて居るやうな口吻^{くちぶり}です。

「何處へ置かれたのでせう？」

と平次。

「殿お側の御手文庫に入れてあつた筈で御座います」

「それほど大事な品を？」

「御參觀の度毎に、御國元から江戸へ御持參になります、江戸御屋敷には御寶藏が御座いません。萬一の場合の用意に御手文庫に入れたまゝ、殿の御側に備へさせられます」

「鍵は？」

「年に一度、公儀の御品調べがあり、外に馬遠の軸物、きぬたせいじ砧青磁の香爐、かうろ聖茶碗ひじりちやわんなどと共に差出し、御調べ済の上、元の御手箱に返したのが、二た月ほど前、鍵は私の兄、側用人桑原伊織が預かりますが、何かの都合で殿へ差上げた時、ほんの半日だけ、

御寵愛^{ごちようあい}のお銀の方に預けられた事があるとお側の者が申して居ります」

「お手箱には變りは無いでせうな」

「何の變りも御座いません」

「すると、桑原伊織様か、殿様か、お銀の方か、この三人のうちの一人が取出されたといふのでせう」

「殿は何にも知らぬと仰せられます、——兄は藩中第一の正直者で、これも嘘^{うそ}偽^{いつは}りを申す筈は御座いません」

「それでは矢張りお銀の方が隠したといふ事になるわけで」

「兄桑原伊織が再三掛け合ひましたが、お銀の方親元源太郎は、

奥方の心が柔らいで、お銀の方がお屋敷に召還された上探して進

ぜよう——といふ傍ばう若無じゃくむじん人の返事で御座います」

「フ——ム」

「五日前に若様——と申しても、御腹様のお銀の方御身持に信用いたしてよいものやら悪いものやら存じませんが、——兎に角、十次郎様御不慮ごふりよのことがありまして、一夜のうちに御他界になつたのを駿河臺上屋敷の者の毒害と言ひ掛りをつけ、毒菓子みの計略で若様を害あやめた下手人を出さないうちは、秘傳書と御墨附も、未み來永劫らいえいこふ此世に出る氣遣は無い、と恐ろしい事を申して居ります」

「フ——ム」

「公儀の御封を受けた品や、東照公御墨附が紛失すれば、明年の御品調べを待たず、小堀家は重くて改易、輕くて減地轉封は免まぬがれ

ません。相手は市井のやくざ者、力づくでも金づくでも思ふ儘にはならず、一家悉く心を痛めて居ります。親分様御力を以つて、一萬二千石小堀家の危急をお救ひ下さるやう、お願いで御座います」

「あッ、拜んぢやいけません。手をお舉げ下さい。私は多寡たくわが町方の御用聞で、巾着切や屋尻切やじりきりを追ひ廻すのが身しん上しやうで、大名方の御家騒動に、首を突つ込むやうな大した働きのある人間ぢや御座いません」

平次はさすがにあわてました。早瀬といふ御守殿が、冷靜そのものゝやうな眼に、涙を溜めて、それを隠すやうに、疊の上へひれ伏したのです。

「二つの品は御屋敷には御座いません。下々しもくの者の手で隠された上は、矢張り親分のやうな方に捜して頂く外は御座いません。もし萬一の事があれば、奥の取締をいたして居る私と側用人の兄は生きては居られません、——兄妹二人の命で濟めば、これほど易たやすい事は御座いませんが、一萬二千石の小堀家の興廢となると、家中の者の難儀は思ひやられます。お願いで御座います、親分」

早瀬はもう顔を擧げる氣力もありませんでした。ガラツ八は、斯んなに冷たい取濟した女も泣くものだらうか——と言つた様子で物珍らしさうにその白い項うなじを見て居ります。

「驚いたらう、親分」

早瀬を送つて出ると、ガラツ八はもう斯んな事を言ひます。

めぎつね

「女狐のやうなお徳に口説かれる方が、まだしも樂だらうよ。

ごしゅでんくづ

御守殿崩しは苦手だ」

平次もさすがに堪能した様子でした。

「これから何をやりや宜いんで」

「もう一度鎌倉町へ行つて見よう、——昨夜から跟^つけ廻したのは、小堀家の者と判つたから、此上の遠慮は要らねえ」

「すると、麻布からあつしを跟けて來たのも、戸袋の蔭の二本差^{りやんこ}も?」

「さうだよ、まさかお側用人の桑原伊織ではあるまいが、奥方一味には違ひ無いよ。お徳の行方ゆくへを跟けて、お前を嗅ぎ當て、それから此處へ來て見張つて居たんだ。今朝鎌倉町へ行つたのを見て、あわてゝ此處へ渡りをつけに來たのさ。一萬二千石のお家の大事だから、家中三蓋總出だらう」

「大名の力でやりや、源太郎の家位は踏ふみ潰つぶせさうなものぢやありませんか、家捜し位はお茶の子さいさいで」

「そんな事をして見ろ、噂は公儀へ筒抜けだ。萬一お妾めかけの持出した二た品が出なかつた日にや、一萬二千石がもろに潰れる、——それに家捜し位のことぢや、祕傳書とお墨付は捜し出せない」

「何處へ隠したのでせう」

「それが判りや、何でも無いがネ」

二人が鎌倉町へ着いたのは、もう夕暮近い頃でした。

「親分さん、お勘坊が逃出しましたよ」

捨吉は早くも迎へて、素晴らしい情報ニュースを知らせてくれました。

「あつ、押へて置くんだけ、飛んでもねえ手ぬかりだ。——書置は？」

「ありますよ、金釘流かなくぎりうで三枚半と」

「そいつは念入りだ」

平次は苦笑ひし乍ら入つて行きました。

源太郎、源助夫婦、お銀、お徳——は首を鳩あつめて、金釘流の判讀中。

「親分さん、お勘坊がこんなものを残して逃出しましたよ」

「聞いたよ、どれく」

お徳の手から受取ると、成程、書きも書いたり、蚯蚓みづずと古釘とが滅茶々に雑居したやうな、素晴らしい難文で、

（——私には好いた同志の男があるから、それと一緒に世帯を持つ、給金の残りと荷物は、いづれ家が決つたら受取りに来る——）
と言つたやうな事を、惚のろけまじ氣交りに、番硬の禿ちびふで筆で根氣よく鼻紙三枚半にのたくらせたものです。

「これは驚いた。氣が付かないではなかつたが、手が廻り兼ねましたよ。見えなくなつたのは、何時頃でせう」

「居ないのに氣の付いたのはツイ今しがたですよ。晩の仕度をさ

せようと思ふと、此始末で」

お冬はひどく機嫌を悪くして居ります。

「あの娘にも男はあつたのかな？」

ガラツ八は感慨無量な聲を出しました。

「そんな氣のきいたものがあるもんですか、出入りの御用聞か何か、からかつたんでせう」

捨吉は少しばかり面白さうでした。

「兎に角、お勘坊の部屋と、埃溜ごみだめを明るいうちに、もう一度見せて下さい」

平次はお徳に案内させて、お勝手に入ると、薄暗い三疊、——
お勘坊の寢間を見せて貰ひました。布團一と揃そろひ、竹行李たけがうりが一つ、

外に何もありません——。竹行李の中にも、お勘坊相應の着物が
あるだけ。

お勝手から裏へ出ると、浅い釣瓶井戸つるべゐどがあつて、物置があつて、
その裏に埃溜があります、何んなに念入りに搜したところで、
菓子かしの片らも見付かることではありません。

平次はグルリと廻つて、狭い路地せまを、鎌倉河岸のお濠の方へ出
て見ました。

「おや？」

平次はお濠端の草叢くさむらに眼を落しました。水際から疊み上げた
石垣の上に、踏み残した草が生えて、その草の中に、菓子かしの粉と
見れば見られる物が落ちて居たのです。

外濠といつても三十六見附の役人の目があつて、今日のやうに、無暗に埃ごみなどは投げこめなかつたのですが、丸橋忠彌が石を投り込んだ内濠と違つて、二十や三十の乾菓子ひなら、夜陰ひそかに投り込めないことでは無かつたでせう。

平次はそのまゝ家の中へ引返しました。朝から出入りした者と、お勘の親元、身元引受人などの名、所を訊くと、それを一々書き止めて、さて、改めて源太郎に向ひました。

「十次郎様を害あやめた下手人は、きつとあつしが捜し出すが、その前に小堀家の寶物——遠州流祕傳書と、東照公御墨附を渡して貰へないだらうか」

齒に衣着きぬせぬ直談判を始めたのです。

「錢形の親分、氣の毒だが、小堀家の寶物とやらを私は知るわけは無い、——それよりかお主殺しの惡黨を先に見付けて下さい」

源太郎は斯う言つた調子です。

「本當に知らないと言ひなさるんだね」

「先づ知らないよ。尤も、孫の敵を討つた上で、又何う氣が變つて寶物とやらを搜して上げない物でもないが」

お銀の小堀家に歸る見込が絶えたとなると、源太郎一家の者は、全く何をやり出すかわからなかつたのです。

「それは無理だ、寶物を引渡さなきア、下手人の出つこはねえ。

一萬二千石の大名を潰して、數百人に難儀をかけたところで、お前さんの手柄にもなるまい」

「お氣の毒だが、錢形の親分、それぢや物わかれだ。親分をお願いひしたのは、素々お徳の阿魔あまの仕業で俺の知つたことぢやねえ。私にして見れば、味噌摺みそすり用人の一人や二人に腹を切らせるより、一萬二千石の大名を叩き潰す方が、どんなに溜飲が下がるかわからねえ。——ね親分、相手がいやな事をしあがると、此處から眼と鼻の間の龍の口御評定所へ驅け込み訴うったへをするからさう思へ——と言つて下さい。源太郎は取つて七十一、もう惜しい命ぢやねえ」

昔鳴らした凄味よみがが蘇へつて、斯う言ひ出したら後へ引く源太郎では無かつたのです。

振り返ると、無口な源助も、その配偶つれあひのお冬も、はねつ返りのお徳も、妙に氣色ばんで、平次の後ろへ詰め寄つて居るではあ

りませんか。

八

その晩、大きな事件が二つありました。一つは、鎌倉町を飛出したお勘坊の死體が神田川に浮いて來たことゝ、もう一つは、源太郎の家は二三十人の覆ふくめん面武士に襲はれて、天井裏から床下まで、残る限なく家捜しをされたことです。

子分と言つても家に居るのはほんの二三人、あとは老年と女ばかり、口は達者でも、七十を越した源太郎、二三十本かけ並べた白刃の前には、どうすることも出来なかつたのです。

この家捜しは、亥刻よつから始まつて申刻半なつはんまでかゝりました。

三分の一は白刃で脅して家族を一室に追ひ込め、あとの三分の一は、部屋々々を舐めるやうに捜し、あとの三分の一は家の廻りを、垣一つ古釘一本も見落さじと調べ抜いたのでした。

が、二つの寶物は何處にもありません。唐紙からかみを割き疊の表を

剥がし、布團の綿を引出し、着て居る着物や帶までも割きました
が、祕傳書と言つた嵩かさ高たかなものは素より、御墨附の紙片一枚さへ見付からなかつたのです。

「ざまア見あがれ、明日は龍の口の評定所へ駈け込み訴へだ。一萬二千石は三月經たないうちに木こつ片ぱみちん微塵さ。それが嫌なら、娘をお屋敷へ呼返した上、下手人に縄付けて來い」

源太郎は曉あかつきやみ闇の中を引揚げて行く覆面武士の一隊を見送つて、氷のやうな冷罵を浴びせました。

「己れツ」

たまり兼ねて、若侍二三人、白刃を閃めかしました。源太郎の首を切る位のこととは、本當に一舉手一投足の勞だつたのです。

「さア、斬つて貰はう。面白いや、俺が斬られても人種が盡きるわけぢやねえ、身内の者が一人でも残れば小堀の家を根こそぎ引つくり返してやるよ。——一人残らず殺されゝば、祕傳書と御墨附は其儘人目に觸れずに腐くさつて了ふばかりよ。さア、斬つてくれ、大名の家と釣替なら、一家七人か八人の命は安いものだ」

源太郎は何時の間にやら、皺だらけの大肌脱になつて、破目の

外れた大啖おほたんか呵かを浴びせるのでした。

二三十人の武士も、これには齒が立ちません。頭立つた中年の武士になだ勧められて、すごくと引揚げて行きます。

一方、お勘坊の死體の揚つたのは、それから一刻も經つてから、ガラツ八の注進で平次が飛んで行つた時は、慘めな姿にこも菰こもを冠せて、數十人の彌次馬がそれを取巻いて居りました。

「退いたく、見世物ぢやねえ」

ガラツ八に彌次馬を追はせて菰こもを引剥ぐと、死んでから反つて綺麗になつたお勘は、濡れ腐つたまゝ何の苦勞もなく眼をつぶ瞑つて居るのです。

胸にひし犇ひしと抱いたのは女物の片袖。

「おや？」

驚く平次。

「見覚えがありますよ、それはお徳のあはせ拾で」

ガラツ八も愕然とした様子です。

「深い仔細があり相だ、鎌倉町へ行つて見ようか」

死體の始末を町役人に任せて、平次とガラツ八は鎌倉町へ飛びました。

お徳に逢つて訊いて見ると、

「そんな馬鹿なことがあるものですか、私の拾は此の通り——」

と奥から出して來たのを見ると、片袖は見事に千切られて居るではありませんか。

「あッ」

お徳はあまりの事に口もきけません。

「氣の毒だが番所まで来て貰はうか」

平次は日頃にも無い容捨のならぬ顔を見せます。

「娘がお勘坊を殺した？ 冗談だらう、そんな馬鹿なことがあつてたまるものか」

源太郎老人はプンプンして飛出しましたが、動きの取れぬ證據を突付けられては、さすがにグウとも言へません。

九

番所へ——と言つた平次は、お徳をつれて眞つ直ぐに家へ歸りました。

「心配することは無いよ。斯うしなきア、本當の下手人げしゆにんが出ないんだ、暫らくの辛棒だ」

平次は家へ歸ると、日頃の平次に返つて、斯んな事を言つて居ります。

「本當に下手人が出るでせうか、親分」

「俺には大抵判つて居るよ、——ところで、昨日の夜の騒ぎの中で、誰か居ない者のあるのに氣が付かなかつたかえ」

「皆んな居ましたよ」

「そんな事は無い筈だが」

「父さんは宵寝^{よひね}だし、兄さんは錢湯へ行つたきりだし、捨さんは風邪の氣味で夕方から床へ入つたし」

「小堀家の武家が押込んだ時は？」

「皆んな居ましたよ、兄さんが仕舞湯から歸つたところを捕まつただけで——」

「皆んな一緒に押し込められたんだね」

「最初は捨さんだけ別の部屋でしたよ」

「フーム」

「だって奥の部屋へ一人で寝て居たんですもの」

こんな話からは、何も引出せさうありません。

丁度その時、路地を入つて來た武家が一人。

「御免、平次殿はお在宅か。拙者は小堀和泉守家中、桑原伊織いおり――

――

眞つ直ぐに名乗るのが、筒抜けに聽えます。

平次はお徳を女房のお靜に預けて、ガラツ八が案内して來た武家と相對しました。

「下手人を出さなければ、本日正午うまこくの刻、龍の口評定所へ訴出る

と言ふ強談ぢや。――主家の安危には替へ難い、拙者いさぎよく名乗つて出ようと思ふ。主殺しの汚名を、萬代の後まで残すのも亦致し方が無い。二品の紛失と若様毒害を言ひ立てられては、小堀家が危ない」

桑原伊織は暗然として首を垂れました。

四十前後の立派な武士、妹の早瀬よりも人間味があつて、何としても主殺しなどをしさうも無い骨柄です。

「致し方が御座いません、お伴いたしませう」

平次に立ち上りました。續くガラツ八。

「お静、一寸鎌倉町へ行つて来る。その客を頼むよ」

外へ出ると、格子の外には、涙を押へて、しよんぼり妹の早瀬が立つて居るのです。

「來てはならぬと言ふのに」

伊織の聲は尖りました。

「私もお供いたします、兄上様」

「いや」

「御菓子に毒を入れたのは、私の仕業で御座います」

「馬鹿なことを」

桑原伊織は取り合はうともしません。

「それでは、せめて兄上様御先途^{ごせんど}を見届けさせて下さいまし」

「――」

伊織は、それもならぬとは言ひ兼ねました。

十

桑原伊織、その妹早瀬、平次とガラツ八が附添つて、鎌倉町の源太郎の家へ乗込んだのは晝少し前でした。

評定所へ 驅込かけこみうつたへ 訴をしようと言ふ源太郎も、下手人が名乗

つて出たのを見ると、さすがに度膽を抜かれた様子で、

「そいつは面白い、侍の腹を切るのを見るのは始めてだ、皆んな
来い」

源助捨吉を始め、尻込をする女共まで呼び集めます。

「拙者生害の上は、祕傳書と御墨附、確にこれなる妹早瀬に御渡
し下さるだらうな」

「よからう、お前さんも武士だ、本當に腹を切ったら、此場で相
違なく渡してやらう」

「然らば、縁先を拜借いたす」

桑原伊織は惡びれたる色ありません。縁側に坐り直すと主家

と思ふ方角を遠く伏し拜んで、肌をぐいと擴げました。右手にはもう一刀の切先近く懷紙で卷いたのを持つて居ります。

「然らば、平次殿、御檢分役ごけんぶんやくを頼み申す」

キラリと光る刃、女共はさすがに顔色を失ひました。早瀬は深々と顔を埋めて、兄の顔を仰ぐ氣力もありません。

「待った」

「――」

「待つて下さい、桑原様」

平次は聲を掛けたのです。

「何だ、平次殿」

「たつた一つ承り度いことがあります。昨夜、此處へ押込んだ時、

外から歸つて來た人間がある筈です。それは誰でした、仰しやつて下さい」

「いや」

「お隠しになるには及びません、昨夜の人数の中に、旦那が入つて居た事は皆んな知つて居ります」

「それでは言はう——」

伊織はグルリと四方を見廻しました。

「此處に居るでせうか」

「居る、その男ぢや」

ピタリと指したのは、捨吉の青褪あをざめた顔です。

「女の着物を着て居たでせう」

「その通りだ。女かと思つて引つ捕へるとその男だ。——剥いだ女の衿は、片袖千切れて居た」

「有難い、旦那、それで何も彼も判りました、腹を切るには及びません」

「何？」

「八、それツ」

平次が聲を掛ける迄ありません。八五郎は飛付いて、逃げ腰になる捨吉を押へたのです。

「な、何をしやがるんだ」

綺麗な顔を引ひき歪ゆがめて争ふ捨吉。

「お勘殺しの下手人だ、——いや、それよりも、十次郎様に上げ

た菓子へ、石見銀山の鼠取り薬を仕込んだのは手前だてめえ」

平次の言葉は凜りんとして響きます。

「嘘だく、俺はそんな覚えはねえ」

「いやある。お銀さんを小堀様の屋敷へ返さない爲に、そんな悪わる企くみをした筈だ。——手前は五年前からお銀さんを付け廻した

が、小堀様のお屋敷へ上ると、妹のお徳に乗り替へたのだ。そこ

ろが、お銀が歸ると、又お徳が嫌になつた。お銀様を小堀様お屋

敷へ返さないやうにする細工に、手前はお菓子へ毒を入れたらう

——若様を亡き者にすれば、お銀さんはお屋敷へ歸る手蔓てづるが無く

なるから行くくはお前の張つた罠わなに落ちて來ると見込んだらう」

「嘘だく」

「その上お勘坊をだまして菓子捨てさせ、お勘坊の口が割れさうになると、もう一度騙だまして家出をさせ、お徳の着物を着て、奥の部屋から拔出し、お勘坊を川へ突落してもその罪を女房のお徳へ着せようとしたのだ」

「嘘だ、そんな覚えは無い」

捨吉は必死と争ひ續けますが、平次の論告は、益々峻しゅん烈れつを極めて、上からくとのしかゝります。

「お銀さんが皆んな知つて居る。手前は大名のお部屋様を口説き廻したらう、太てえ奴だ、——もつと證據が欲しかつたら手前が鼠取りを買つた生藥屋きぐすりやを伴れて來ようか」

「——」

捨吉はもう争ふ力も抜けて、ガラツ八の膝の下に組敷かれてしました。

「斯うなれば、小堀様の寶物は、伊織様へお返しするのが順當だ。爺さん、祕傳書と御墨附、出してやつて下さい」

平次は改めて源太郎の方へ向直ります。

十一

「御免蒙らう」

源太郎の答は以ての外でした。

「えッ」

「俺はな、平次親分、そのお侍が腹を切つたら二た品を出すと言つたが、捨吉を縛つたら出すとは言はなかつたぜ。ねえおい、錢形の、若いくせにまうりく耄碌をしちやいけねえ」

「それは話が違ふだらう、爺さんとつ」

平次も今更驚きます。

「何を言やがる。爺さんくと安くして貰ひ度くねえよ、安岡つ引のくせにしあがつて、神田の源太郎を知らないか」

源太郎は何時の間にか、片肌を脱いで、かなひばし鐵火箸のやうな脛をピタリピタリと叩いて居ります。

「今となつて、そんな事を言ふのは、爺さんにも似氣ないぢやないか」

「何を、そんなに欲しきア、自分で捜せ、錢形の平次が聽いて呆れらア。俺の隠した物を捜し出せなきア、坊主にでもなるが宜い」

「――」

平次は黙つて考へ込みました。大名種の孫に死なれて、娘が元の屋敷に歸る見込が無いとなると、一克者の源太郎がこれ位の事を言ふのも無理はありません。

「どうだい、平次」

「それぢや、俺が捜し出して持つて行く分には、文句は無いだらうな」

と平次。

「文句も糸瓜へちまもあるものか」

「よしッ」

平次はもう立上つて外へ出て居ります。それを追ふ大勢の眼。
「爺さん、お前の手柄にさせる積りで、今まで知らん顔をして居たが、斯うなつちや仕方があるまい」

平次は釣瓶井戸を覗くと、眞新しい竹竿を、釣瓶のブラ下つたまゝ、縁側へ持つて行きました。

「この釣瓶の竿の中から何が出るか知らないが、小堀様へお詫の印、せめて爺さんの手で竹を割つた方が宜からう」

平次はさう言つて、一挺の鉋なたを、源太郎の手に持たせたのです。

×

×

×

「親分、釣瓶の竹竿に寶物二た品を仕込んであると、何うして判

りましたえ」

ガラツハは繪解をせがみます。鎌倉町から平次の家を指して歸る途中です。

「家の中でなきやア、居廻りに隠してあるんだ。源太郎は昨夜放つて置けば腐ると言つた相だから、多分外だらうと思つた」

「フーム」

「あれだけの物を隠すのは、人の思ひも寄らぬ場所だ。二た品とも紙だから思ひも寄らぬ場所と言ふと火の中でなきア、水の中さ。火の中へは隠せるわけが無いから一番先に井戸を見ると、釣瓶の竹竿が新しくて、やけに太いちやないか、——その上端の方に、節を抜いた穴へ、栓せんを打ち込んで塞いである」

「なア——る」

「水の中へ書き物を隠すのは、竹筒の外に無い、——と斯う考へたのさ」

「源太郎に竹を割らせた時、さすが強情な親爺も男泣きに泣いて居ましたよ」

「あれで小堀様から、少しでも捨扶持すてぶちが貰へるだらうよ——憎いのは捨吉だ。お主の一粒種を殺し、お勘坊を殺した上、女房にまで濡れ衣を着せようとしやがつた」

「可哀想なのはお徳で——」

「それを考へると、俺は足が進まないよ」

二人は眞にトボトボ家路へ向つて居たのです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第六卷 兵庫の眼玉」同光社磯部書房
1953（昭和28）年6月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1935（昭和10）年11月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2015年6月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

御落胤殺し

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>